メテンナンショウがマムシグサとアオテンナンショウの交雑によって起源したと推定した。四国や瀬戸内海の島にはマムシグサもアオテンナンショウも普通であり，自然交雑の起る可能性は十分にある。また，マムシグサとアオテンナンショウを人工交配して作った雑種と仏炎苞の形状がよく似ていることもこの仮説を支持している (Fig. 6)。本種の花序付属体は，下部が緑色で上部はしばしば紫褐色となる。一般に，他の形態の中間性から雑種と考えられるテンナンショウ属の個体では，花序付属体の上部と下部とで，質や色彩に明らかな差があることが多い。

□金属鉱業事業団：**昭和63年度レアメタル賦存状況調査報告書** 218 pp. 1989. 同事業団. 非売品. 地下の特定の鉱物の存在を示す植物のことは聞いていたが，日本でもこれを真面目に調査する動きがある。鹿児島県で，既知の金鉱床を横切る約 1 km の帯状区間でいろいろな植物を採り，葉の分析値を主成分分析した結果，鉱床上とその前後では金の含量にかなりの差があることが報告されている。とくにヤブムラサキでは顕著であった。土壌の分析値よりも葉の方が指標としての有効さが高いという。こういう手法が確立されれば，過去と現在の標本を比較して，環境中の物質（とくに重金属）の変遷を論ずることが可能となるので，ハーバリウムの存在意義が再認識されるにちがいない。専門機関なので，分析を海外に依存しない方がよいと思う。　　(金井弘夫)

□大場秀章：**秘境・崑崙を行く** (岩波新書76) 194 pp. 1989. 岩波書店，東京. ¥490. 水があるのに植物が生えていないという環境は想像がむづかしい。本書は旅行記であるが，新しい状況に直面した著者のつぶやきがちりばめられており，触発される多くのものを含んでいる。大勢の中国人研究者の中に一人まじっての行動も，いわゆる海外調査とは様子の違うもので，今後の研究協力のあり方の参考となる。　　(金井弘夫)

□林 弥栄 (監修)，平野隆久 (写真)，畔上能力・菱山忠三郎・西田尚道 (解説)：**山渓ハンディ図鑑 1，野に咲く花** 623 pp. 1989. 山と溪谷社，東京. ¥2,900 (税込). どのページも花満載で印刷も美しい。大きな生態写真と共に，いろいろの角度から見た花やその細部，果実などの小型写真が並び，その合計約 2,400 枚だという。この超アップ写真が特徴で，線画とは一味ちがったルーペで見る感じは大変わかりやすい。解説を分担された 3 氏は実地に大変詳しい方々で，要領よく丁寧に書いておられるので，超アップ写真と相まって初めての人でも「あ，これだ」とすぐわかるにちがいない。20×12 cm の大きさ，厚さも約 2 cm で扱いやすい。　　(伊藤　洋)